

BISTRO下水道シンポジウム

～下水道×農業の新ビジョンを考える～

▶8月3日

東京ビッグサイト会議室20名／オンライン100名
ハイブリッド開催

🎤 プレゼンテーション

下水汚泥の農業利用に向けて ～今、注目すべき資源について～
国土交通省下水道部 下水道企画課下水道国際推進官 岩淵 光生

みどりの食料システム戦略(仮題)
農林水産省大臣官房 環境バイオマス政策課課長補佐 溝添 正一

資源枯渇時代の「BISTRO下水道」哲学とビジョン
～地球規模で共有される自然循環機能の視点～
岩見沢市農政部 農業基盤整備課長 斎藤 貴視

下水汚泥由来肥料利用促進に向けた取組み
～プラットフォーム化の構築をめざして～
日本下水道協会 技術部技術課 井澤 大

下水汚泥の緑農地利用拡大に向けた実態調査に対する一考察
～廃止されたコンポスト施設と成功地域の比較分析と考察～
東京大学 下水道システムイノベーション研究室 研究員 龍神 健太

BISTRO下水道 はじめの一步 ～ビジョンの共有と仲間づくり～
じゅんかん育ちLAB 馬淵 沙織

🗣️ フリーディスカッション

テーマ BISTRO下水道×農業の新ビジョン
ファシリテーター
加藤 裕之 (東京大学 下水道システムイノベーション研究室)



ロシアのウクライナ侵攻などの海外情勢が大きく変化し、農業生産に欠かせない肥料価格の高騰が農業現場を悩ませている。そこで、注目されている一つに汚泥肥料がある。調達に困難が生じたいま、化学肥料に依存してきた「従来どおり」を見直すチャンスとも言える状況だ。

そうした背景を踏まえて、8月3日に開催された「BISTRO下水道シンポジウム」にオンライン参加してみた。「22下水道展の併設企画で、「下水道×農業の新ビジョンを考える」をテーマに左のプログラムで進行した。概要紹介は割愛し、2つの視点で報告する。

BISTRO下水道とは、2013年に誕生した下水道資源(再生水、汚泥肥料、熱・二酸化炭素等)を農作物の栽培等に有効利用し、農業等の生産性向上に貢献する取り組みを推奨するプロジェクトである。国土交通省と(公社)下水道協会が下水道資源の有効活用に取り組みむ地方公共団体等と呼びかけ、情報の水平展開を促進し、生産された食材を「じゅんかん育ち」としてブランディングしてきた。

今回のシンポジウムでは、食・資源・経済の好循環を生みだし、「地域(人)」が元気になるビジョンを下水道や農業に関わるさまざまなステークホルダーが一堂に会すとあったが、登壇者に農業者はいなかった。行政と識者の報告に終始していたのだ。だが、行政や下水道業者に比べて経営規模は小さくとも、事業経営として汚泥肥料を積極的に活用しようとする農業経営者がいるはずだ。彼らが、インフルエンサーになれば、いつまでも農業現場に汚泥肥料を使っていたら、という前提を崩せるのではないだろうか。

社会実装のヒントを提示

一方で、有意義なプレゼンター

ションを披露してくれたのは、岩見沢市農政部の斎藤貴視氏だった。BISTRO下水道プロジェクトが発足した当初は下水道課の職員として、現在は農業に携わる職員として、汚泥肥料の生産・普及に関わってきた当事者である。その経験から「自ら生み出した資源を、地球に還すこと」という視点で捉え直すことを提案したのだ。

具体的には、社会実装のヒントとして、まずは発想の転換を迫った。下水道汚泥を産業廃棄物の「副産物」として出てきてしまっている物と扱われがちだが、肥料登録できるものなので「調製物」として扱うべきだと述べた。たとえば、重金属リスクの評価については、堆肥や化学肥料に比べて厳しい検査が義務付けられているが、重金属が入っているだけで「悪者」になり正しく評価されなくなることの危うさを訴えていた。

さらに今後「みどりの食料システム戦略」のもとで展開するなかで、下水道事業者に丸投げしないよう呼びかけ、物流や法令の最適化や地域循環と都市圏も含めた循環等の課題を指摘した。社会実装に移る段階で、こうした課題の解決が求められるだろう。(加藤祐子)

第90回『農業経営者』セミナー

「国産農産物の需要拡大のカギを握るのは何か」

▶8月4日

オンライン配信

2017年10月の開催を最後に休止していた『農業経営者』セミナーが再始動した。編集部として、読者の皆さまの「面白い話を聞きたい」「異業種交流の場がほしい」「面白い縁を紹介してほしい」という要望に応える場になるよう尽力する次第である。

出会った人を元気づける 鳥山さんの魅力が全開！

再開第一弾は、茨城県内の農産物を多方面で支援している製パン会社社長の鳥山雅庸さんを講師に招き、「国産農産物の需要拡大のカギを握るのは何か」をテーマに講演いただいた。読者に限らず幅広く声掛けいただき、当日は40名余りが参加し、盛会となった。

鳥山さんは、茨城・栃木・福島3県のセブニーイレブンで販売するパンを製造する会社の社長でありながら、茨城県産の農産物の応援団を頼まれもしないのに自ら引き受ける熱血漢だ。21年秋、茨城・栃木・福島の大手コンビニエンスストアのパン売り場に、地元産小麦を使ったパンが並んだが、この北海道産以外のパン用小麦を使った商品化の仕掛人である（本誌1月号・2月号の特集を参照）。

セミナーの前半は、ゆめかおりパンの実現に至るまでの舞台裏を語っていただき、鳥山さんに小麦を提供している高橋大希さん、片岡孝介さんのほか、当日参加していた小麦生産者にも話題提供いただいた。

後半は、イチゴやブルーベリー、メロンをはじめ、鳥山さんがこれまで応援してきた農産物のリストが披露され、参加者が希望する項目について、その経緯を話していただいた。需要者という立場を越えて、地域の農産物の生産現場を訪ね歩き、出会った魅力的な人たちと語り合う。その輪を広げる活動の一端に触れ、参加者からは「講演を聞いて元気になった」「行動力に刺激を受けた」「面白かった」という感想が届いた。

図らずも、オンライン形式ながら、講演後に質疑応答の場を設ける通常のセミナー形式から脱線し、鳥山さんを中心に参加者の声を聴きながら進む、いわばサロンのような場になったのも、鳥山さんの人徳のおかげであろう。

今後も『農業経営者』セミナーは、オンライン配信にて定期的開催を予定している。ご興味のある方はぜひご参加ください。

■第91回『農業経営者』セミナーのご案内

コメ問題を斬る ~コメ問題のこれまでとこれから~

開催日：9月8日(木) 19時30分～21時30分 (Zoomによるオンライン配信)

講師：小川真如氏 (農業経済学者・(一財)農政調査委員会 調査研究部 専門調査員)

参加費：1,500円



【講師プロフィール：小川真如（おがわ・まさゆき）氏】

1986年鳥根県生まれ。2009年に東京農工大学農学部を卒業、11年に同大学院農学府修士課程を修了。新聞記者を経て、早稲田大学大学院人間科学研究科にて学び、現在、農政調査委員会専門調査員、東京農工大学非常勤講師、恵泉女学園大学非常勤講師など。専門社会調査士、修士（農学）、博士（人間科学）。著書に『水田フル活用の統計データブック』『水稲の飼料利用の展開構造』がある。

今年6月に『日本のコメ問題』と『現代日本農業論考』の2冊を上梓した農業経済学者の小川真如さんを講師に招き、コメ問題の本質に迫っていただく企画です。「コメ余り」から「田んぼ余り」、そして「農地余り」へ。絶対的な答えを求めがちな現代に、「考えていくための考え方」を提示いただきます。

講演後に、質疑応答・懇談の時間がございます。全国各地の水田では実りの秋を迎え、収穫作業で忙しい季節となりました。開催時間を遅めに設定しています。コメ問題に関心のあるさまざまな立場からのご参加をお待ちしております。



申込はこちら▶<https://farm-biz-seminar91.peatix.com>